

『探偵新聞』とはどのようなメディアであったのか？
 同紙は戦後占領期をどのような視点から切り取ろうとしたのか？
 そして、一方で警察権力に協力的な姿勢を見せつつ
 同時に日本探偵作家クラブからの支援も受けるというスタンスを取ることで
 どのような紙面が実現できたのか？

『探偵新聞』

—占領期のカストリ・探偵小説関係新聞

全一卷・別冊【復刻版】

監修・解題—石川 巧 (立教大学)
 推 薦—成田 龍一
 山前 讓

資料提供—立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター/
 ミステリー文学資料館 (一般財団法人光文文化財団)

造 本—A4/A5判 並製・総302頁
 価 格—19,500円 (別冊のみ分売可1,500円)
 刊 記—2021年5月 ISBN978-4-910363-32-5

—収録資料—

【一巻】(228頁) 18,000円
 『探偵新聞』1～55号
 (探偵新聞社、1947年7月20日～1949年3月25日)※35号欠

【別冊】(74頁) ISBN978-4-910363-33-2
 *解題・総目次、推薦文



だが、『探偵新聞』に限っていうと他のカストリ新聞にみられる「猥褻」な記事はほとんどなく、読物も純然たる推理ものばかりである。

『探偵新聞』の最大の特徴は江戸川乱歩をはじめとする日本探偵作家クラブの会員が積極的に記事を投稿したり取材に答えたりして協力体制を築くとともに、警察側からもふんだんな資料提供をしてもらい、まるで探偵小説作家と警察とを橋渡しする媒体としての役割を担っていることである。

カストリ新聞はその多くが戦後成金や山師たちが資金を出して一攫千金をもくろんだものだが、現場の編集や記事執筆はインテリ層人材が担当し、一時的ではあるが全国で膨大な部数を売り切っていた。

戦後の混乱期、日本人にとってカストリ新聞のロゴが甘美な媚薬となっていたであろうことは、その販売部数からも明らかである。

カストリ新聞は「その場限り」の「低俗」な娯楽読物であり、定期刊行物として図書館が保存対象とするものではなかった。

一般書店に並ぶことはなく、露店や駅の簡易スタンドで売りさばかれ、全国の好事家に郵便発送されるという流通形態をとった。

監修・解題……石川 巧

全一卷・別冊【復刻版】

『探偵新聞』

—占領期のカストリ・探偵小説関係新聞

類縁書のご案内

『国際女性』—占領期女性雑誌メディア【全1巻】

編・解題—石川 巧
 造 本—A5判・上製函・総376頁
 価 格—22,000円

『出版文化』—日本出版文化協会機関誌1941～50
 (戦時占領期出版関係史料集 2) 【全5・別巻】

監 修—大久保 久雄/福島 鑄郎
 説—吉田 則昭
 造 本—B5・A5判/糸上製函/総1,950頁
 揃 価—108,000円

戦後初期の出版社と文化人一覧
 【全4巻】

監 修—大久保 久雄/福島 鑄郎
 造 本—B6判・糸上製函・総1,450頁
 揃 価—60,000円 (各巻15,000円)



占領期の新聞・出版・放送メディア界

—『新聞協会報』【全7巻・別冊】

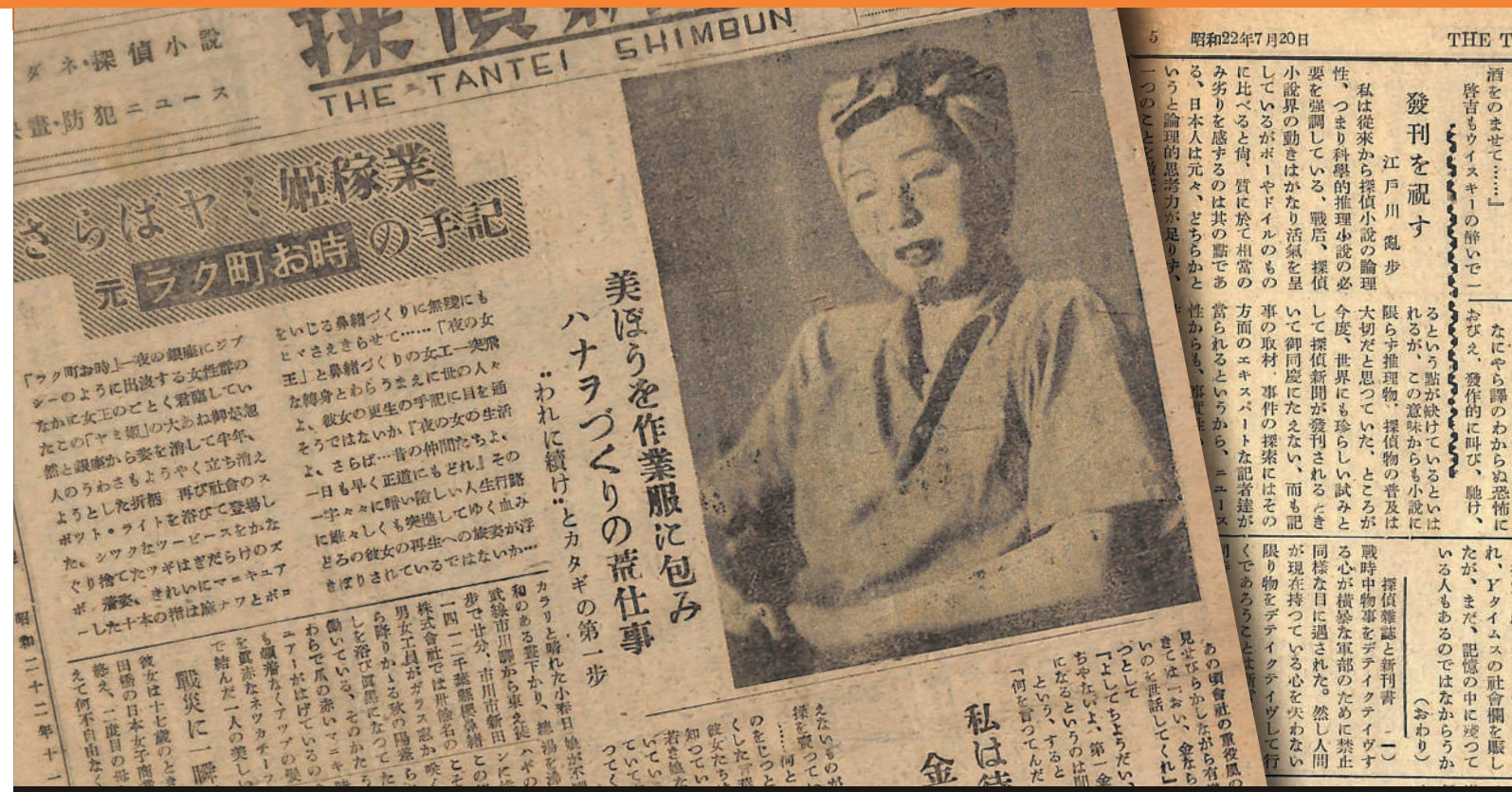
監修・解題—井川 充雄
 造 本—A4判上製/A5判並製 (別冊のみ)
 総約2,150頁
 揃 価—188,000円



Kanazawa Bumpokaku
 金沢文圃閣

〒920-0867 金沢市長土塚2-16-30
 Tel 076-261-8884 Fax 233-3111

口書店様へ…ありがとうございます 直接小閣までお申し込みください
 図版はすべて本書より価格は税別 052/07/4000



Kanazawa bumpokaku
 金沢文圃閣

探偵

敗戦

直後の探偵小説ブーム——国民国家再起動の拠点

アジア・太平洋戦争の敗戦後、これまで「圧迫」されていた探偵小説が復活し、探偵雑誌（『新青年』『宝石』など）や新刊書の刊行が相次ぐ。そのことを報じるとともに、みずからもその一環として『探偵新聞』（1947年7月20日）が発刊した。同紙の記事は、「自由を今取りもどし、〔探偵小説の〕けんらんたる花は開かうとしている」（『探偵雑誌と新刊書（1）』）と続ける。

『探偵新聞』『発刊のことば』は、「民主主義の国に探偵小説は発展し、全体主義の国では栄えない」といい、「探偵小説の興隆、それはひいては民主主義国家としての日本の興隆で〔ある〕と述べ、より積極的に事態を後押しする。

もともと、『探偵新聞』の実際の紙面は、探偵小説とともに映画や探偵小説家が紹介されるとともに、犯罪実録・犯罪実話が多くを占める。カストリ雑誌の雰囲気を持ち、猟奇的な事件が好んで取り上げられている。1947年の紙面を繰るだけでも「巷にエロの風が吹く」（第2号、8月15日）や、「上野の女歯科医

世相

と探偵小説をヴィヴィッドに捉えて

戦時中、新聞メディアは報道に厳しい制限を受けていた。その反動と言えるだろうか、新たにGHQの検閲が始まったとはいえ、終戦直後の紙面には「自由」があった。そこに、経済的に安定しない混迷した社会を反映した、凶悪な犯罪が起こる。社会部記者は張り切ったに違いない。

しかし、たかだか4頁ほどの日々の新聞では伝えきれないこともあったのだろう。昭和22年7月にスタートした『探偵新聞』は、警視庁三階の記者クラブ（地方紙、夕刊紙記者溜り）が中心となって発刊されたという。新聞とはいっても旬刊だから、「巷にエロの風が吹く」「ナンセンス殺害事件（マダーケース）」、「阿部お定さんの爆弾訴訟」といった見出しからは、雑誌感覚で編集されたことが分かる。興味本位のアプローチかもしれないが、

（なりた りゅういち／日本女子大学名誉教授）

成田 龍一

殺し」（第5号、10月5日）をはじめ、歌舞伎役者・片岡仁左衛門が殺された公判の報道（第6号、10月15日）とセンセーショナルな話題を扱う。「ラク町のお時」の手記を掲げる一方（第8号、11月5日）、「隠退蔵物資の摘発」を全号挙げて報道する姿勢も見られる（第7号、10月25日）。「明朗民主文化国家再建へこうけんしたい」（『発刊のことば』）といいつつ、性欲・食欲を軸とする、人びとの欲望と好奇心に目を向けている。

だがしかし、探偵小説は（『発刊のことば』を待つまでもなく）、暴力や拷問にかわり推理と論理が尊重され、民主主義を根幹とする国民国家の精神と通底している。戦時の暴力を耐え忍ぶなか、荒正人や平野謙ら、のちに『近代文学』に集結する作家たちが探偵小説の犯人当てをしていたことも思い浮かぶ。探偵小説が、敗戦直後にブームとなったことは、国民国家を再起動しようという希求にほかならないであろう。犯罪実録と探偵小説が併載されることもふくめ、廃墟のカオスのなかから、ひとつの脈脈を伝える『探偵新聞』から読み取りうることは多い。 □

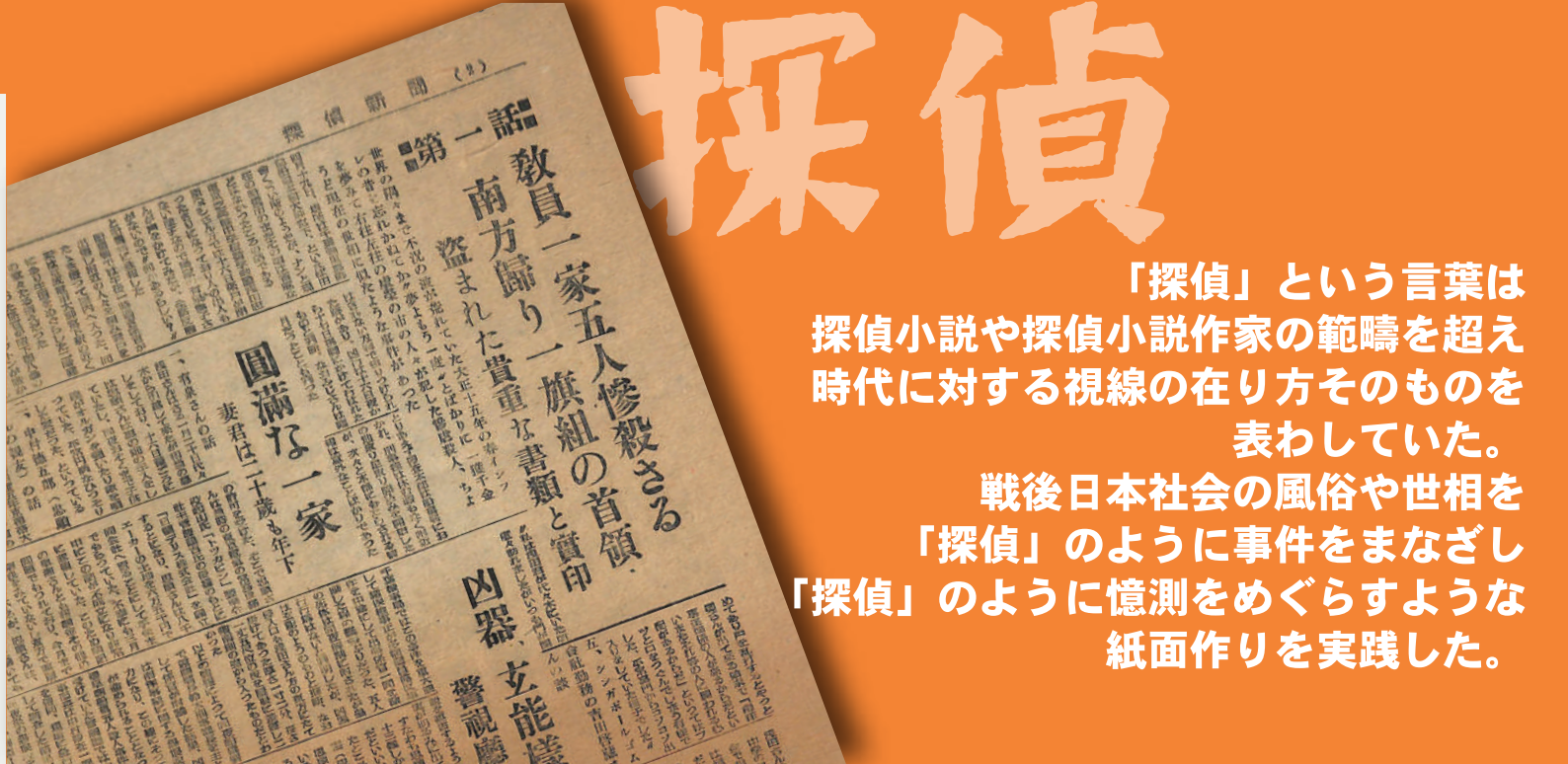
（やままえ ゆずる／推理小説研究家）

山前 譲

犯罪の諸相に迫っているのは確かだ。

探偵コト、新刊や映画の紹介、作家の紹介と、当初から探偵小説関連の記事はあったが、昭和23年からメインとなっていく。探偵小説もまた、戦後、勢いを取り戻したジャンルだった。斯界のニュースや懸賞小説募集と、限られた紙面のなかで意欲的な編集をしている。なよりの功績は、評論家・中島河太郎のデビューの場となったことだ。第11号（昭和22年12月5日）から連載された「日本探偵小説略史」は江戸川乱歩から高く評価され、書誌的研究を次々とまとめていくようになる。

わずか1年半ほどの発行だったが、その紙面からは終戦直後の社会情勢、そして探偵小説界の動向が凝縮されていて大変興味深い。 □



創刊号からはじまるもうひとつの企画「御存知探偵小説家」本連載には下記小説家の履歴や近況が紹介されている。

江戸川乱歩／甲賀三郎／海野十三／横溝正史／渡邊啓助／城昌幸／大坂圭吉／木々高太郎／大下宇陀児／水谷準／角田喜久雄／山本禾太郎／小栗虫太郎／小酒井不木／延原謙／西田政治／松本泰／平林初之輔／葛山二郎／夢野久作／妹尾アキ夫／瀬下耽／橋本五郎／葉山嘉樹／岩藤雪夫／林房雄／佐々木俊郎／羽志主人／正木不如丘／南篠十七／平林たい子／保篠龍緒／長谷川伸／高田義一郎／牧逸馬／山下利三郎／大倉あき子／岡本綺堂／野村胡堂／佐々木味津三／西尾正／蒼井雄／本田緒生／カポリー／フォルチュネ・デュ・ボアゴベ、／ルヴェル／ウイルクイ・コリンズ／コナン・ドイル／G.K.チエスタトン／イーデン・フィルポッツ／フリーマン・ウィルス・クロフツ

掲載されている探偵小説

東震太郎「新人傑作 黄色い影」／小松川勝一「推理小説 迷える芸術」／保篠龍緒「指紋のナゾ」／保篠龍緒「探偵小説 窓ガラスの破片」／保篠龍緒「刑事小説 刑事手帖」／小山慶一郎「刑事小説 街の悪魔」／東震太郎「探偵小説 盗賊入門—死囚囚獄悔録より—」／香山滋「連載探偵小説 呪いの古墳」／城昌幸「連載探偵小説 秘密の秘密性」／楠田匡介「懸賞当選作品 雪」／中里十七「懸賞当選作品 五行会殺人事件」／岩田賛「花壇に降った男」／逢海昇「懸賞当選作品 舞姫(ダンサー)殺人事件」／渡邊知枝「短編探偵小説 赤い屋根の家」／コナン・ドイル「世界名作探偵小説物語 バスカービルの犬」／エラリー・クイーン「世界名作探偵小説物語 禍の町」／ウィリアム・ウイルクイ・コリンズ「世界名作探偵小説物語 月長石」／アガサ・クリステイ「世界名作探偵小説物語 アクロイド殺し」／ジロルジュ・シムノン「世界名作探偵小説物語 モンパルナスの夜」／ガストン・ルルウ「世界名作探偵小説物語 黄色の部屋」／エドガア・アラン・ポー「世界名作探偵小説物語 モルグ街の殺人」／フレッチャー「世界名作探偵小説物語 カートライト事件」／杉本章「或る自殺者」／杉本章「推理小説 赤いコスチューム」

